源信の仏性論

——從來説の再検討を通して——

柳 澤 正 志

恵心僧都源信の仏性論が『一乗要決』で大成されたことは衆目の一致するところであろう。源信の仏性に対する思索は多岐に亘っている。先行研究を概観するに、思索の一部の抽出、ないしは鎌倉仏教各宗派への影響などが多くを占めてい

ると思われる。源信の仏性論を一言にて表すことは困難であるが、八木昊恵氏並びに福原蓮月氏は源信の仏性論を「信心仏性」と規定された⁽¹⁾。これは親鸞の仏性思想を語る用語であり、そこに源信の影響のあることは先学の説くところである。八木・福原両氏の論拠をおおまかに要約すると以下のようになる。①『往生要集』と『一乗要決』で仏性と衆生の關係を語る時、『涅槃經』の水と水の喩えをよつて仏性即衆生・衆生即仏性を説いている。②両書で同じく「仏性為因」という『涅槃經』の文を引用している。しかし、これがそのまま源信に当て嵌まるかは疑問の生じるところである。以下源信の仏性観、信心観について検討する。

では、源信は仏性についてどのように考えていたのであ

うか。『往生要集』巻上では縁事の誓願の利益を説く中、仏性について次のように説いている。

問。縁_レ事誓願亦有_二勝利_一耶。答。雖_レ不_レ如_レ縁_レ理、此亦有_二勝利_一。何以知者、上品下生業、云_二但_レ發_二無上道心_一、不_レ云_レ解_二第一義_一。故知、唯是事菩提心。若不_レ爾者、与_二彼中生業_一、必_レ無_レ別_{也其}……止觀引_二秘密藏經_一已云、初菩提心已能除_二重々十惡_一。況第二・第三・第四菩提心耶、云云。所_レ言初者、是三藏教縁_二界内事_一菩提心也。何況深信_二一切衆生悉有_二仏性_一。……問。信_二解衆生本有_二仏性_一、豈非_レ縁_レ理。答。此是信_二解大乘至極道理_一。非_二必_レ第一義空相應觀慧_一。

ここでは縁事の誓願の利益は縁理のそれには及ばないとしている一方、縁事の初発心において十惡を除くことができる⁽²⁾と説き、ましてや一切衆生悉有_二仏性_一を深く信じるものならなおさらであるとする。そして続いて、仏性を信解することは縁理ではないのかと問い、それは大乘至極の道理を信解することであつて空理相應の觀慧ではないと答える。重要なのは、

仏性を大乘至極の道理と説き、信解はあくまで縁事と考えている点であろう。同様に『往生要集』巻上でも仏性を理と説く。

今反質云、汝若煩惱即菩提故、欣起「煩惱惡業」、亦必「生死即涅槃故欣受」生死猛苦。何故於「刹那苦果」猶厭難堪、於「永劫苦因」欣自恣作。是故當知、煩惱菩提雖是一、時用異故染淨不同。如水与氷、亦如「種果」、其体は一、隨時用異。由「此修」道者顯「本有仏性」。不修道者終無顯理。⁽³⁾

水と氷の喩と種子と果実の喩で生死即涅槃、煩惱即菩提を説く。ここでも本有仏性を理とし、その理を顕現するために修道を必要とすると説く。こうした思想は未再治本『六即義私記』にも見られる。六即について解説する中、「謂六故明事、即故明理。是故、以有「理仏性」故、有「名字乃至究竟」。有「發心修行」故理仏性顯是。」⁽⁴⁾と、理仏性が六即到底していることにより、名字即以降があるとする。また、理仏性が顯れるのは發心修行によると、『往生要集』と同様の記述が見られる。『一乗要決』巻下では理仏性・行仏性について次のように述べる。

衆生本有「仏性」、平等無異。若理性遍、行性不定。比丘応言、我身中仏性、一有、一不定。若二具者、成仏無疑。若唯一者、定不成仏。豈可總言「定有「仏性」、更約「闡提」說中成・不成」⁽⁵⁾。衆生の本有仏性は平等無異であり、理仏性に偏することはな

く、行仏性が不定であることもないのである。以上を勘案するに、本有仏性とは大乘至極の道理である。しかし、理のみが強調されるのではなく、理仏性と行仏性の併存が原則であることが見て取れる。

さて、一方の信心についてであるが、『往生要集』では、「如レは無量生死之中、得「二人身」甚難。從得「二人身」、具「諸根」亦難。從具「諸根」、遇「二仏教」亦難。從遇「二仏教」、生「信心」亦難。」⁽⁶⁾と、人身の得難きことと、仏教に遇い難いこと、そして信心の生じ難いことを説いている。また『往生要集』巻下では『安樂集』からの引用を用いて、信心の移ろい易いことを次のように説く。

問。若凡下輩亦得往生、云何近代、於「彼国土」求者千万、得無「一二」。答。綽和尚云、信心不深、若「存若亡」故。信心不「一」、不「決定」故。信心不「相續」、余念間故。此三不「相應」者、不能「往生」。若具「三心」不「往生」者、無「有是處」⁽⁷⁾。

信心とは深いものではなく、存在したり亡んだりするものであり、不定のものであるという。その信心の基体たる衆生の心について『往生要集』巻中で次のように考察する。

三者応念、今我惑心具足八万四千塵勞門、彼弥陀仏具足八万四千波羅蜜門、本来空寂一体無礙。貪欲即是道。悲・癡亦如是。如「水与氷」、性非「異處」。故経云、煩惱菩提体無「二」、生死涅槃非「異處」⁽⁸⁾。我今未「有」智火分」。故不能「解」煩惱水」成「功德水上」。

願レ仏哀愍我、如二其所得法一、定慧力莊嚴、以レ此令二解脫一。如是念已、拳レ声念仏而請二救護一。如二止觀一云、如下人引重、自力不前、假二傍救助一則蒙レ輕拳上。行人亦爾。心弱不能排障、称レ名請レ護、惡緣不能壞。已上若惑覆心不能令欲修通別対治。須知二其意一。常為二心師一不レ師二於心一。

源信は煩惱即菩提・生死即涅槃の理を説くと同時に、人心は惑いに覆われた弱い存在であることを指摘し、そこに阿弥陀仏の名を称えることで加護を請う必要性を説くのである。一方、『二乗要決』では信心と一闡提との関わりについて説かれる場面がしばしば見受けられる。次の引用は信心の有無と一闡提について説くところである。

問。涅槃第九云、除二一闡提一、其余衆生、聞二此經一已、悉皆能作二菩提因縁一。法声光明入二毛孔一者、必定当レ得二阿耨菩提一云。既入二毛孔一、為二菩提因一。何論二信心有無別耶一。答。衆生以レ心為主。一切事隨心轉。故無レ信者身不レ容二受声光一。或入二信心、名レ入二毛孔一。如是等例非一。或除二一闡提等文、正顯二闡提信心分無レ益。法声光明等文、傍不レ遮二闡提身分有レ益耳一。

引用した『涅槃經』の文に対して、信心の有無の別を論じている。源信は、衆生は心を主とするのであり、一切の事象は心の転変に随って起こるとする。故に無信の者は仏の声や光を目の当たりにしても受容しないのであり、信心のあるものは毛孔より受け入れるのである。難解なのは、続く文で

「或除一闡提等文、正顯闡提信心分無益。法声光明等文、傍不遮闡提身分有益耳」とある点である。これを信・不信という観点より読み解くと、一闡提は仏を目の当たりにして法を聞いても、その心を益することはない。何故なら無信であるからである。一方、物理的に仏の声を聞き、仏心の光明を受けるという身体的利益は受けることができる、というであろう。一闡提でも仏の利益を受けられるのか否かという問題が残るところである。この信心は源信の一闡提観を考える上で重要な意味を持つ。『二乗要決』巻中では以下のようにその関係性を説く。

言二除一闡提等者、於二仏法中一、以レ信得レ入。如二涅槃二十二云一、是菩提因。雖復無量、若説信心、則已攝尽云。一闡提名信不具足。余諸難處、不名不具。故除闡提。

源信は一闡提を信不具足と名づけるとしている。すなわち、一闡提は仏性の無いものをいうのではなく信心の無いものをいう、とするのである。また、一闡提の仏性の有無を論じて「明一切衆生悉有仏性者、非是少分。若猶堅執少分一切、非唯違經、亦信不具。何因衆作一闡提耶。」⑪とも述べ、一切悉有仏性を信じないものが一闡提であると説く。源信にとって、信心が菩提への分岐点となるといつても過言ではないのであろう。このことは『往生要集』巻中からもみとれる。

問。既知、修行総有四相^二。其修行時、用心云何。答。觀經云、若有^三衆生、願^三生彼國^二者、發^三三種心、即便往生。一至誠心。二深心。三回向發願心。善導禪師云、一至誠心。謂禮拜・讚歎・念觀三業必須^二真實^一之故。二深心。謂信下知自身是具足煩惱^一凡夫、善根薄少、流^二三三界^一未^レ出^レ火宅^一、今信知弥陀本弘誓願、及再稱^二名號^一下至^二十声^一等^甲、定得^レ往生^上。乃至一念、無^レ有^二疑心^一。三回向發願心。謂所作一切善根、悉皆回向願^二往生^一之故。具此三心^一必得^レ往生^一。若少^二二心^一即不^レ得^レ生。略抄之。經文雖在上品上品不能具。鼓音聲經云、若能深信無^二狐疑^一者、必得^レ往生阿彌陀國^一。涅槃經云、阿耨菩提、信心為^レ因。是菩提因雖^二復無量^一、若說信心^一則已攝尽。^已上明知、修^レ道以^レ信為^レ首。^{（12）}

ここでは四修を行ずる時の用心について論じている。源信は『觀經』の三心、『鼓音聲經』の深信無狐疑の者、『涅槃經』の信心為因を援用して、「道を修するに信を以て首と為す」と答えている。特に『觀經』の三心では善導『往生礼讃偈』を引用している。ここでは深心が強調されて説かれていて、「二念も疑心あることなし」とある。この一言にこそ源信の意図が見い出せるのではなからうか。このように源信は信心を重視し、修行の用心の要とした。生じ難く、移り易い信心ではある。しかし、仏道修行を考えた時、信心を持つて仏の加護を持つことにより、菩提への道が開けると考えたのではなからうか。そして、この信心を重視する姿勢は終始一貫変わることなく、晩年に一闡提を考える時にも貫かれたもので

あつたと言えるであらう。

さて、信心は修行時の用心において重要な位置を占めるにも関わらず、発し難く保ち難いものだと源信は考えていた。そうなると、菩提への道は険しいものであると想定される。仏性との関わりで考えると、「見仏性」ということが、一つの鍵となる。天台教学で考えると、『摩訶止観』巻二下で六即を説く中、分真即について、「分真即者、因^二相似觀力^一入^二銅輪位^一。初破^二無明^一見^二仏性^一、開^二宝蔵^一顯^二真如^一、名^二發心住^一。乃至等覺、無明微薄智慧轉著^{（13）}」とある。これによると、仏性を見ることができるのは分身即以上、つまり初住以上ということになる。また、無明を破して仏性を見るところであるから、容易く見ることはできない。一方、『一乗要決』巻中には『涅槃經』から次のように引用する。

又第二十七云、一切衆生、具^二足三定^一。謂^二上中下^一。上者謂^二仏性也。以^レ是故言^二一切衆生悉有^二仏性^一。……下定者、十地中心數定也。是故言^二一切衆生悉具^二下定^一。一切衆生悉有^二仏性^一、煩惱覆故、不^レ能^レ得^レ見^二。十住菩薩、雖^レ見^二一乘^一、不^レ知^二如來是常住法^一。以^レ是故言^二十住菩薩、雖^レ見^二仏性^一、而不^レ中明^上了^{（14）}。

『涅槃經』では十住の菩薩は不明了ながらも仏性を見ることができると説く。これについて『涅槃經』巻二十五には「善男子。如^二汝所^レ問、十住菩薩以^二何眼^一故、雖^レ見^二仏性^一而不了了。諸仏世尊、以^二何眼^一故、見^二於仏性^一而得^二了了^一。

善男子。慧眼見故不_レ得_二明了_一⁽¹⁵⁾。仏眼見故故得_二明了_一。という記述が見られ、十住の菩薩が仏性を明了に見られないのは慧眼で見るからとする。湛然『法華玄義釈籤』巻五では次のように解釈する。

言「慧眼見故而不了_二者、此是別教十住慧眼之位。全未_レ見性名為_二不了_一。又若約「実道」即是相似見性、亦得_二名為_二見不了_一」⁽¹⁶⁾。

湛然よれば、『涅槃経』の十住は別教の十住である。これを円教の六即到当てはめれば相似即となる。いづれにせよ、相当の修行を経なければ仏性を見ることはできない。

以上、信心仏性への疑問に端を発し、源信の仏性観・信心観について検討してみた。源信が信心をその仏道探求の要としていることは、一闡提についての言及より見て取れた。源信にとって、一闡提とは無信の者である。一闡提にも仏性はあるというのが一切衆生悉有仏性の意味であると源信は考える。その時、信心を仏性と同義とすると矛盾が生じる。源信は「修_レ道以_レ信為_レ首」という。信心は修道の入口であり菩提へ向かう要でもある。同時に、それは衆生の心に起因する、生じ難く、弱いものでもある。そうした認識の下、阿弥陀仏の加護を請いながら、信心を因として修行し、仏性の開見を求め菩提に向かうという姿勢が、源信の立場であろうと考えるのである。

Ⅰ 八木晃恵『恵心教学の基礎的研究』第二部第一篇第三章、福

源信の仏性論（柳澤）

原蓮月「往生要集における仏性説の一考察」『印度学仏教学研究』二一—二（一九七二・一二）参照。

2 大正八四・五二頁上。

3 大正八四・四九頁中下。

4 青蓮院蔵本、六丁左_レ七丁右。

5 大正七四・三六四頁上。

6 大正八四・三九頁下。

7 大正八四・八一頁中。

8 大正八四・六五頁上。

9 大正七四・三五五頁上。

10 大正七四・三五五頁上。

11 『二乗要決』巻中、大正七四・三四三頁下。

12 大正八四・五八頁上中。

13 大正四六・一〇頁中下。

14 大正七四・三四四頁上。

15 大正一二・七七二頁中。また『二乗要決』巻下（大正七四・三五九頁中）には、「此_レ頭_二仏性有_二見不見_一。非_レ頭_二衆生有_二一具不具_一。故上文云。須陀洹人、斯陀含人、斷_二少煩惱_一。仏性如_レ乳。阿那含人仏性如_レ酪。阿羅漢人、猶如_二生蘇_一。從_二辟支仏_一至_二十住菩薩_一、猶如_二熟蘇_一。如來仏性、猶如_二醍醐_一。」という記述も見られ、十住の菩薩の見る仏性は熟蘇味の如しとされる。

16 大正三三・八四九頁中。

〈キーワード〉 源信、仏性、信心、一闡提、信心仏性

（早稲田大学大学院）

tury. He lectured on the *Shikan girei* written by Chanjan. Etatsu recorded the content of the lecture and summarized it in the work *Shikan girei inokuma shō*.

In this book, Shōgen criticized various opinions about Shikan, meditation theories of the Chinese Tendai sect. A distinguishing characteristic of his claim is that his theory about Shikan is mixed with a doctrine of esoteric Buddhism of Japanese Tendai sect.

32. Genshin's Idea of the Buddha-nature

YANAGISAWA Masashi

It is hard to speak briefly about Genshin's Idea about the Buddha-nature. Kōe Yagi and Rengetu Fukuhara argued his doctrine as the same as Shinjin-busshō 信心仏性. This term is used to express Shinran's doctrine of the Buddha-nature, and many scholars pointed out the influence from Genshin on this subject. But I am not in a position to agree with Yagi and Fukuhara's opinion.

Genshin thought that Icchantika have insufficient faith but do have the Buddha-nature. If piety is the same as the Buddha-nature, there is a contradiction in his doctrine. He regarded piety as a most important key for training. Genshin thought that through training, beings will see the Buddha-nature and become spiritually enlightened.

33. The Kamakura Period Manuscript of the *Banzhouzan* 般舟讚 in the Kongōji-Temple 金剛寺

MINAMI Hironobu

The Amano-san Kongōji-Temple has the only existing one page manuscript of Shandao's (善導 613–681) famous commentary *Banzhouzan*. We can determine the age of the manuscript as being copied at least during the Kamakura period from the existence of guiding marks for rendering Chinese into Japanese Kanbun. And we can understand that it is a manuscript of a different type from its style and the difference of its characters (慊恨 / 悔恨), thus realizing the limits of philological studies. This manuscript gives us an